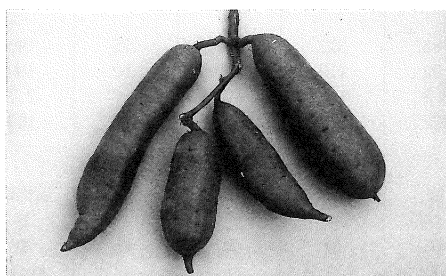


かんしょ新品種の紹介

良食味で形状がよく多収の
青果用かんしょ新品種

「春こがね」



「春こがね」の塊根

農業研究センター 作物開発部／
かんしょ育種研究室 田宮 誠 司

1. はじめに

現在の青果用かんしょの主力は「ベニアズマ」と「高系14号」で、関東東海地域ではほとんどが「ベニアズマ」である。「ベニアズマ」は収量が高く、肉食が黄色で、食味がきわめて良いという長所を持つ反面、いもが大きくなりやすい、あるいは形状が乱れるという欠点を有している。これまでウイルスフリー化、晩植の回避などの技術でこの欠点をカバーしてきたが、高温・干ばつなどが続く近年の環境条件下では問題が顕在化してきた。

「春こがね」は「ベニアズマ」の肉色・食味を生かしつつ形状の安定化をねらって育成したものである。

2. 育成の経過

「春こがね」はいもの形状が安定し、病害虫抵抗性の「関東103号」を母本、多収・良食味の「ベニアズマ」を父本とした交配後代（交配番号87053）で形状が安定し、良食味・

多収を目標として選抜した系統である。

1987年に九州農業試験場畑地利用部かんしょ交配研究室（指宿）で交配を行い、1988年に農業研究センター作物開発部かんしょ育種研究室において交配種子を播種し、実生個体選抜を実施以後、系統選抜試験、生産力検定予備試験、病害虫抵抗性検定などを実施した。1992年には「関系41」として、生産力検定試験、特性検定試験および系統適応性試験に供し、1993年から「関東108号」の地方番号を付して特性並びに地域適応性検定を行った。「春こがね」は関東東海地域を含む暖地・温暖地である程度の高い評価を受けたが、低温・寡照などの環境条件により、塊根肥大が不十分となり、いもが長すぎるという欠点が指摘され、沖縄県を除く地域では奨励品種として採

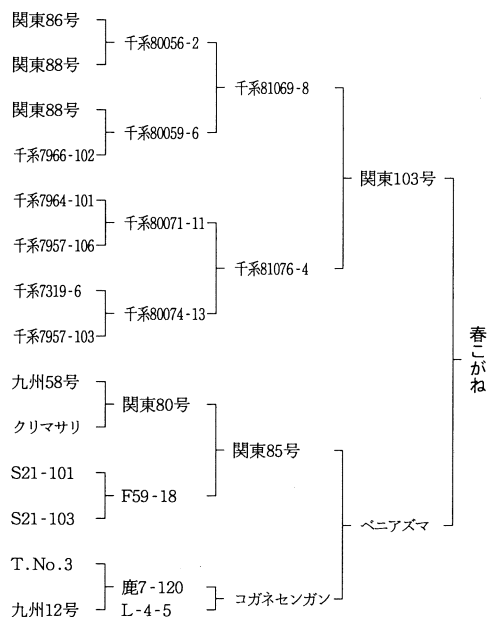


図1 「春こがね」の系譜

表1 「春こがね」の特性一覧表

調査方法	試 験 地	農業研究センター (谷和原畑圃場)			沖縄県農業試験場 (園芸支場) (現地・与那城町)					
		平4～9年マルチ普通畑			平6～9年春・初夏畑			平8～9年春・初夏畑		
	調 査 年 ・ 種 類	品 種 ・ 系 統 名	関東108号	ベニアズマ	高系14号	関東108号	おきひかり	ナカムラサキ	関東108号	おきひかり
(塊根特性)										
	いもの形状		長紡錘	長紡錘	長紡錘	長紡錘	長紡錘	長紡錘	長紡錘	紡錘
	いもの皮色		より濃赤紫	濃赤紫	赤紫	濃赤紫	紫紅	淡紫紅	濃紫紅	紫紅
	いもの肉色		黄	黄	淡黄	黄	淡黄	淡黄(紫)	黄	黄
	いもの外観		やや上	やや上	中	上	中	中	やや上	中
(収量特性)										
	上いも収量(kg/a)		339	252	226	264	313	287	175	190
	同上対標準比(%)		135	100	90	92	110	100	92	100
	株当り上いも個数		3.9	2.3	2.4	3.9	4.3	4.0	2.7	2.7
	上いも1個重		227	272	234	127	136	134	162	169
	切干歩合(%)		34.2	37.4	34.1	—	—	—	—	—
(蒸しいも特性)										
	肉 色		黄	黄	淡黄白	黄	淡黄	灰黄白	黄	淡黄
	肉 質		中	やや粉	中	やや粉	中	中	中	粘
	纖 維		やや多	中	中	微	微	微	微	微
	食 味		やや上	やや上	中	上	やや上	中	上	やや上
	萌芽性		良	良	やや良					
	貯蔵性		中	難	易					
	黒斑病抵抗性		やや弱	弱	やや弱					
	つる割病抵抗性		弱	中	やや弱					
	立枯病抵抗性		中	中	弱					
	ネコブセンチュウ抵抗性		やや弱	やや弱	弱					

用されるまでにいたらなかった。

しかし、沖縄県では春から初夏期にかけて収穫した「春こがね」の塊根は表皮が滑らかで、形状やそろいが良く、既存の奨励品種と比べて外観品質に優れ、また、蒸しいもはやや粉質できめ細かくあっさりした甘みを備えており、食味が良いという評価を受けた。そこで「春こがね」の普及によって、これまで県外移入に頼ってきた黄肉色系サツマイモの県内自給率の向上が期待できるため、奨励品種への採用が予定された。このため1998年に農林水産省新品種「春こがね」として命名登録した(図1)。

3. 特性の概要

1) 形態的特性

「春こがね」の地上部は、草型がほふく型で、巻きつる性は無い。葉型は波・歯状心臟形で葉色は緑、頂葉色は淡緑である。茎およ

び節の着色はやや多く、葉脈の着色は中、蜜腺および葉脚の着色は多い。茎の太さはやや細く、長さはやや長い。

地下部の特性では、しよ梗は短く、強い。いもの形状は長紡錘型で形状の揃いが良く、大きさは大である。条溝がわずかにみられるが、裂開および皮脈は無く、外観はやや上である。いもの皮色は「ベニアズマ」よりも紫が濃く、肉色は黄色である。うんおよびカロチンは見られない。

2) 生態的特性

萌芽性は良く、萌芽数はやや多く、揃いは中で、萌芽および伸長は早い。

育成地における上いも重は、マルチ早掘り栽培および標準栽培のいずれにおいても「ベニアズマ」を34～35%、無マルチ標準栽培および多肥栽培でも20～23%上回り多収である。しかし、株当たりの上いも個数が「ベニアズ

マ」の約1.5倍と多く、上いも1個重は「ベニアズマ」よりも少なく、極端な大いもは見られない。切干歩合は「ベニアズマ」よりやや低く、マルチ栽培で約35%、無マルチ栽培で約32%である。配布先における上いも重は「ベニアズマ」に比べ、茨城で13%、埼玉で30%優れるが、千葉では2%劣る。「高系14号」に比べ、愛媛で8%、長崎で30%、鹿児島で12%優れる。沖縄では「ナカムラサキ」に比べ、8%劣る。

3) 品質特性

蒸しいもの肉色は黄色で、肉質は中、繊維はやや多い。食味は「高系14号」に優り、「ベニアズマ」並のやや上である。蒸しいものBrixは「ベニアズマ」よりは低いものの「高系14号」より高い。蒸しいものを放置した際の黒変程度はマルチ栽培では「ベニアズマ」より少ない。

4) 耐病害虫性

黒斑病にはやや弱、つる割には弱、立枯病には中、ネコブセンチュウにはやや弱の抵抗性を示す。

貯蔵性は「高系14号」に劣るものの、「ベニアズマ」より優れ中である(表1)。

4. 栽培適地および適用範囲

温暖地および暖地のかんしょ生産地帯に適し、当面沖縄県で普及が見込まれる。

沖縄県内で生産され市場流通している代表的な品種は、「紅いも」と呼ばれる「宮農36号」と「備瀬」の2品種である。黄肉系かんしょである「高系14号」や「ベニアズマ」は収量が低く、形状がそろいにくいために生産はほとんどなく、外観品質に優れる県外産が年間を通して移入されている。県内かんしょ栽培の振興を図るには100%近くを県外移入

に頼っている黄肉系かんしょの県内での生産体制を作る必要がある。

春から初夏期にかけて収穫した「春こがね」の塊根は表皮が滑らかで、形状や揃いが良いため、既存奨励品種の「おきひかり」、「こがねゆたか」と比べ数段外観品質が良く、県外産にも見劣りしない。蒸しいもはやや粉質できめが細かくあっさりとした甘みを備えており、食味が良い。

「春こがね」の普及によってこれまで県外移入に頼ってきた黄肉系かんしょの県内自給率の向上が期待できる。主に沖縄本島を中心に春から初夏期の市場出荷用としての普及を見込んでいる。

5. 栽培上の注意

1) ネコブセンチュウおよびつる割病に対する抵抗性が不十分であるので、多発圃場での栽培はさける。

2) 低温・寡照等の環境条件によって塊根が肥大不足となり、形状が長くなりすぎることがある。

6. おわりに

本品種は「ベニアズマ」の肉色・食味を生かしつつ形状の安定化をねらって育成したものであるが、関東東海地域では低温・寡照の環境でも長くなる欠点が指摘された。しかし、沖縄県での栽培試験で安定した形状と良食味との評価を受け、奨励品種として採用の予定であり、今後沖縄県での黄肉系かんしょの普及に役立つことを期待しているところである。最後に「春こがね」の育成にご援助、ご協力をいただいた関係者各位に感謝の意を表する。

「春こがね」育成者 小巻克巳、田宮誠司、片山健二、樽本 勲、石川博美